

## “時というもの”



巻頭言

岸本 忠三\*



人と会った時，“お忙しいでしょう”というのが大体決まった挨拶のようである。“おヒマでしょう”というのは滅多にない。“忙しい”ということはイコール“社会において重要な役割を果たしている”ということの意味するのであろう。情報が光の速さで世界中をかけめぐり、国の垣根が消失していく“情報化社会”になって、人はいよいよ多忙になっていくようである。しかし、果たしてそれが真の“幸せ”や“豊かさ”につながるのかということを考えさせられる。

時というのは考えてみれば不思議なものである。地球の一回の自転を24等分して1時間と決め、それを60等分して1分と決めている。時間を計る手段として時計やカレンダーはあるが、同じ1時間でも、あっという間に過ぎることもあれば、非常に長く感じられることもある。人夫々によって、また置かれた条件によってその長さは違う。従って時は古来より多くの哲学者、思想家の命題でもあった。

数年前に亡くなったドイツの童話作家ミカエル・エンデの有名な作品に「モモ」がある。この中で彼は「光を感じるために目があり、音を感じるために耳があり、そして時を感じるために心がある。」と述べている。正に時は夫々の人の心によってそ

の存在が感じられるものなのであろう。

この「モモ」の中に時間泥棒に時間を盗まれて心貧しくなっていく床屋や観光ガイドが登場する。客とムダ話をしながら、ゆっくり髪を整え、休日には老いた母や身体障害の女友達を見舞うという生活をしてきた床屋が自分の人生に疑問をもつ。時間を有効に使えば一角の人になれると時間泥棒にそそのかされ、客と話もせずにとんどん仕事の効率を上げ、母親や女友達も見舞わず、時間を有効に使ったが、さて振り返ってみて一体その時間はどこへ蓄えられたのか、果たして人生は豊かになったのか、と作者は問いかける。テレビ、新聞に取り上げられた観光ガイドは有名になり、講演依頼が殺到し、飛行機で飛び回っても全部をこなせず、講演内容の十分な用意もできず、焼き直しのお話を繰り返す。経済的にはおおいに豊かになるが、何かしら満足できないものを感じ始める。見事に現代の多くの文化人と称される人々を現わしているのではないだろうか。

ヒトの心拍数は1分間に60、ネズミはその10倍、ゾウはヒトの半分という。寿命は心拍数に反比例する。考えてみれば、一生にうつ心臓の拍動は合計すればヒトもネズミもゾウも同じ位になるのであろう。ネズミの拍動数で働き、ゾウの長さを生きることはできないということは神の決めた摂理であろう。与えられた全拍動数をどのように使い、どのように生きるか、それは夫々の人の好みによるのであろうか。

\* Tadamitsu KISHIMOTO

1939年5月7日生

昭和39年3月大阪大学医学部医学科卒業

現在、大阪大学総長、医学博士、内科学・免疫学

TEL 06-879-7004